

京都の伝統織物で感動を！ 魅力発見プロジェクト

1 目的・概要

本プロジェクトの目的は、伝統織物やその文化的背景を様々な観点から見て、感じた織物の魅力を発信することです。私たちが経験・体験したことを通じて、より多くの人に伝統織物ならではの魅力に気づいてもらう方法を模索しました。春学期は実際に6つの工房に取材に行き、1つ1つの工程に職人の丁寧で質の高い技術が存在していること、多くの職人の手によって支えられていることを学びました。また学生を対象に実施したアンケートから、伝統織物に対する興味はありながら、「敷居が高い」という意見を多く得ました。

秋学期は①春学期で私たちが感じた伝統織物の魅力を発信し、②伝統織物に対する認識をより身近なものに感じてもらいたい③実際に手にとってもらい、生活に取り入れてほしいと考えました。そして「見て・触れて・体験できる」をテーマに企画展を開催しました。

Annual Schedule

2016年	4月～6月	伝統織物の製作工程の工房取材 学生を対象としたアンケート実施
	7月	春学期成果報告会
	9月	夏合宿、魅力発信のための企画提案
	10月～11月	企画展に向けた準備、議論
	12月	アートスペース「余花庵」にて企画展「ORIMONO JAPAN」の開催



2017年 1月 まとめ

2 成果達成度

春学期は、私たちの織物に対する理解や関心を高めることを目標に工房取材を行いました。また一般の方々と知識を得た私たちとの認識の違いを知るためにアンケートを行いました。

春学期の成果として挙げられる事は、私たちが伝統織物への関心や、興味を深められたことです。初期は殆どの学生が伝統織物への知識がほぼ0の状態でしたが、春学期終了時にはメンバー全員がそれぞれに、分業の素晴らしさや、高度な職人技、後継者問題等の、伝統織物の魅力や課題を発見することができました。



夏期休暇中の合宿では、春学期の課題や成果を踏まえ、秋学期の活動の指針を話し合いました。春学期に各々が見つけた魅力を伝えられる企画展の開催と、コンセプト「見て、触れて、体験できるアート（織物）」を決定しました。

秋学期では今までの活動を踏まえ、企画展に向けて準備しました。企画展の目標を『私達が春学期の工房取材を通して見つけた魅力（分業、匠の技、現代の織物技術を用いた小物）を広く来場者に伝え、実際に持ちたいと思ってもらうこと』とし、当日に向け活動しました。秋学期は、主観的・客観的の2つの側面から成果を得られました。主観的成果は、企画展開催後の反省会で多くの学生が挙げた、春学期に得た知識、魅力を来場者との対話によって伝えられたことです。客観的成果は企画展中に行ったアンケート調査から得ることができました。アンケートは日本人、外国人それぞれに対して行いました。織物に対して興味を持ったか、知識を深められたか、買いたいと思ったか、またどの織物が魅力的であったかなどを問うもので、119人から回答を得られました。アンケート回収率はおよそ33%（337人中119人）と芳しくなかったですが、アンケート回答者の99%の人が、「より興味を持てた」と回答して、良い結果を得る事に成功しました。また、アンケート結果より、織物がただ「使える」ものとしてではなく、「織物を装飾として使用し、部屋を華やかにしたい」と考える人が多数いることを知りました。額入絵織物は、職人による季節感、質感・色彩の変化など、数多な表現技術が1つの作品に凝縮されているため、美的感性を刺激された来場者が多くいました。伝統織物に興味をもってもらう重要なポイントとして、この美的感性の刺激は額入絵織物や帯といった大きい織物に対して特に感じられていると考えられます。

これらの考察より、人々の織物への関心を効果的にもたらすものは、小物商品よりも帯や額織物であるということが分かりました。しかし、同時に実際に買いたいと思えるのはお手頃な値段の小物商品であるという結果が得られました。

1年間を通じての成果としては、私たちの織物に対する知識、関心度を深められたこと、より効果的に織物を広める方法（額入絵織物や帯の煌びやかさで織物の魅力を伝え小物商品を推す）を得たことです。今後は、織物に関する企画の継続的持続、そして美的感性の刺激による購買促進という課題に向き合っていくべきだと考えられます。

3 プロジェクトを通じて

私たちは伝統織物への知識を得ることからスタートしました。龍村先生の他、たくさんの職人さんの工房を訪ねて、その技術を間近に見て伝統織物に大変な手間と精緻な技術が込められていることを知りました。最終的にメンバーみんながどのような魅力を感じたか議論を重ね、見かけだけではない、伝統織物の奥深い魅力を発見出来ました。

企画展では、今までインプットしてきた伝統織物の魅力を人々に発信しました。自分たちが得た知識を等身大で来場者に伝える事の難しさを実感しました。どうすればうまく伝わるのか客観的な目線を常に意識することで、物事を離れた目線から捉えられるようになりました。

8人という少人数であったからこそ、少数精鋭で1人1人が自分に合った役割を果たすことが出来ました。1人では気付かないことも多々あり、時には意見がぶつかることもありましたが、しかしその度に自分の意見を省みることで成長を実感し、改めてコミュニケーションを取る事の大切さを学びました。

1年間で振り返り、この授業を通して間違いなくメンバー全員が成長できたと実感しています。



編集後記

本プロジェクトを振り返ってみると、とても密度の濃い1年間でした。情報を発信するにあたって、伝統織物に秘められた魅力を一般の人々に伝えるのは簡単なことではありませんでした。しかしプロジェクトメンバーが団結して、方法を探り、結果的に成功できたことには自信を持っています。科目担当者の龍村先生、科目代表者の大久保先生、SAの香ノ木さんには多大なお力添え、ご指導をいただきました。本当にありがとうございました。

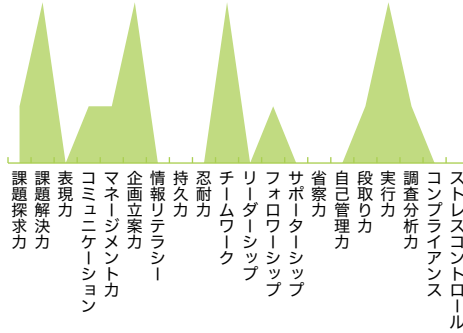
プロジェクトメンバー

江頭 佑里花(文2) 實 貴雄(法2) 畑中 恵里奈(経済2) 宇野 幹也(経済3) 藤原 慎太郎(経済4)
谷村 亮典(商3) 阿江 志織(政策3) 三原 花梨(グローバル地域文化2) 香ノ木 麻由(SA)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

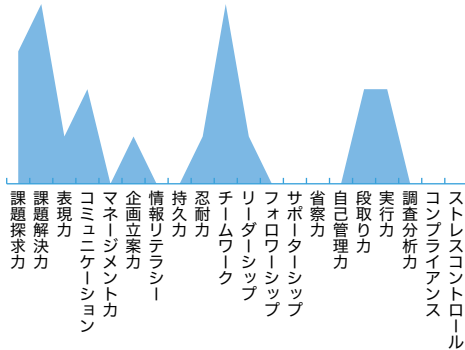
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

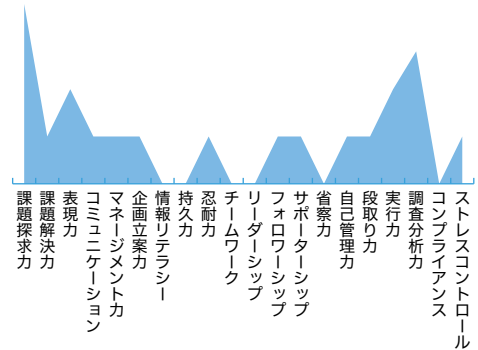


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

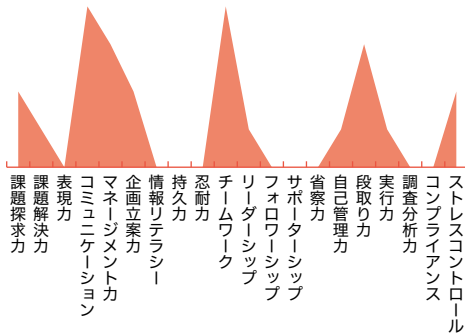


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

